

五輪特需？スケート場人気再燃

トリノ五輪で金メダルに輝いた荒川静香選手らスケート陣の活躍を受けて、アイススケート場の人気がうなぎ上りだ。近畿にある約二十施設の今シーズンの入場者は昨年に比べ一・五―二・五倍の伸び。客層のほとんどが五輪や世界選手権などのテレビ中継に誘発された初心者というが、一方でスケート場そのものは、レジャーの多様化やコスト高などもあり、この十年で半減したという。施設関係者らは「人気が一過性のものでなければいいが…」と複雑だ。

大阪市浪速区に昨年十月、オープンしたばかりの「浪速スポーツセンター」。事務局によると、ここ数日の一日当たりの入場者数は平日で百人以上、休日は三百人以上。オープン当初から約三倍の伸びで、特に五輪開幕後は、通勤電車並みの混雑ぶりだ。

ほとんどが初心者の若者か、幼児の手を引きながら滑っている家族連れ。時折、上級者が華麗なターンを決めると拍手が起きていた。スケート初体験という大学生の女性(三〇)は「五輪中継を見て、あのスピード感を味わいたくなった。滑れないけど、そこが面白い」。五歳の長女を連れて約十年ぶりにスケートをしたという男性会社員(三〇)も「女子のフィギュアに家族みんなでハマった。うちの娘も選手になれればいいと思ってる」と話す。

本格的な競技も可能な大阪府立門真スポーツセンター(門真市)や京都アクア

ゴールドラッシュ

アリーナ(京都市右京区)などでは休日の入場者が千五百人を超え、入場制限をした日もあった。スケート教室も盛況で、大阪府柏原市のアクアピアイスアリーナでは「昨年末に募集を開始したが、二週間ぐらいで定員オーバーした」。

同府枚方市の遊園地「ひらかたパーク」のリンクも、今月のスケート客は昨年同期比で5%アップ。特に土曜日だった今月十八日は遊園地全体の入場者四千九百人のうち八割以上がスケート目的だったという。

しかし、かつてはスキーとともに冬のレジャーの主役だったスケート場もここ数年は、逆風に立たされていた。十年前までは近畿二府四県には約四十施設があったが、現在は半減。中でも民間企業が経営する施設は数カ所しかなく、商売としての魅力が薄れていた。

原因は、レジャーの多様化や少子化に加え、施設維持のための高いコストなどがある。昨年二月、スケート場事業から撤退した同府箕面市の「箕面観光ホテル」は「二カ月半のオープン期間で維持費は五千万円以上。入場者が十万人を超えないと採算に合わない事業だった」(企画室)と振り返る。

施設関係者らは、こうした事情を長年抱えてきただけに「今回のブームにしても安易に喜んでいいわけではない」との声も聞こえる。

近畿の施設
入場者
1.5―2.5倍

ひらかたパークの倶野隆副園長は「人気を一過性で終わらせたくない。競技レベルを向上させるためにも、新たな集客対策を考えたい」と話している。

ダイヤモンド・アイス即日完売

金メダリストの荒川静香選手をはじめ、浅田真央選手ら日本のフィギュアスケートのトップ選手が一堂に会し、エキシビションで共演する「KTVダイヤモンド・アイス2006」(四月二日、大阪・なみはやドーム)で開催、産経新聞社、関西テレビ放送など主催)のチケットも今月十九日に発売されたが、即日完売、アイススケートブームの勢いをうかがわせている。